## (昭和11年6月25日受領)

## 本邦に於ける猫の有棘顎口蟲 〔附〕其發育に就て

(挿 圖 3 個)

# On a First Case of *Gnathostoma spinigerum* Owen in Japanese Cat, with Especial Reference to its Development

(Three Figures)

吉田貞雄•斧原一芳•富羽源造

大阪帝國大學醫學部

## Sadao YOSHIDA, Kazuyoshi ONOHARA, Genzo TOMIHA

Medical Faculty, Osaka Imperial University

#### Résumé

Since Owen first described this worm from the gastric tumor of a young tiger which died in the London Zoological Gardens, there have been about a dozen reports on the adult from the dog, wild and domesticated cats, leopard, weasel etc. and on the larval form in man from various countries but especially from India, Siam, Malay States, Phillippines, China and Japan. In the foreign cases, the adult form was almost all reported from the gastric tumor of the carnivorous mammals. In Japan Yoshida have examined about 6565 mincks during past twelve years and found over 50% of them infected. The animals are invaded in the lower part of esophagus to form the tumor and never found infected in the gastric wall.

Recently Onohara and Tomha accidentally found the domesticated cats infected with this worm in the gastric wall. This is probably the first one of this worm found in Japanese cat.

In the morphological comparison of three groups of this worm: 1. the foreign worms, 2. worms from Japanese cat, 3. those from the Japanese minck, there is no specific difference of characters among them with only exception of their size. The variation of worm size, however, is probably effected by the different methods of their preservation.

For the development of this worm, Yoshida devoted himself to study on this subject since 1925, and confirmed the following facts by numerous experiments.

The uterine eggs develop into mobile embryos for 5 days or a week in the most favorable conditions, and immediately hatch out. The free swimming embryos easily enter into the Cyclops and develop into the definite size with a head bulb which is characteristic to this worm. Yoshida confirmed also that the larvae in the Cyclops never develop in the final host as cat etc., and consequently they need the second intermediate host to complete their life history. Thus since the summer of 1935, numerous feeding experiments were carried and the fact was assumed that the green frog and the gold-fish may serve as the second intermediate host of this parasite.

本蟲は1836年 Owen が London 動物園で死んだ若き虎の胃壁に形成せられた腫瘍中に發見し記載して以來十數名の報告者があつて、その成蟲や幼蟲に關する報告を公にしてゐる。

565

ZOOL, MAG. (JAPAN), VOL, 48, NOS. 8-10, 1936.

本蟲は主として東洋の熱帶亞熱帶部に位する印度,暹羅,馬來,比律賓,支那等に發見せられ、歐洲人の報告したものでも。其材料は多く前記の各地から得られたものである。而して母蟲は虎・豹・猫・犬等の肉食獸に寄生し胃壁に腫瘍を形成するのが普通である。幼蟲は往往人體皮下に寄生し1種の匐行症を惹起すると信ぜられてゐる。最近獨逸の Costens がシャム在住中に實見した本蟲幼蟲症として啻に皮下寄生のみでなく。内部に寄生し1種の内臓疾患の症狀を呈するもののある事實を報告してゐる。成蟲幼蟲共に從來は之を發見するものが少かつたが,近來印度や暹羅地方から比較的屢報告されてゐる。

本邦に於ては大正3年吉田がその知人で岐阜縣に在住してゐた秋山氏から,イタチから得た腎蟲なりとてイタチの內臟と共に送つて貰つた標本中,そのイタチの食道部に可なり大きな腫瘍があつて其外表に小さな蟲體が突出してゐるのを見た。然し當時は腎蟲の幼若なものであらうと思ひ深く探索をしなかつたが,後日イタチの顎口蟲を研究する樣になつて始めて之が顎口蟲によつて形成せられた腫瘍で,夫から突出してゐるのは本蟲體である事を認める樣になつた。

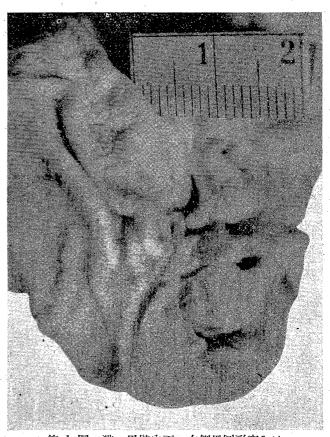
吉田は1924年偶然その助手濱田(今は故人)とイタチの食道部に本蟲を發見して以來,十有餘年之が調査を繼續してゐるが,關西地方のイタチは約その半數に本蟲が寄生してゐる。而してイタチでは必ず食道の下部に腫瘍を形成し決して胃壁には見られぬ。今參考の爲め1924年以來吉田が調査したイタチの本蟲に犯されてゐる狀態を示す表を掲げる事にする。

第 1 表

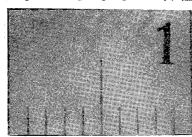
	イタチ檢査	雄蟲檢查數	雌蟲檢查數	感 染 數	雄蟲感染數	雌蟲感染數
年女	總數	%	%	%	%	%
1924—1926	23	16 60.56	7 30.43	12 52.17	12 75.00	,
1926—1927	126	101 80.16	25 19.84	76 60.31	70 69.31	24.00
1927—1928	304	$\frac{234}{76.97}$	70 23.02	234 76.97	187 79.91	47 67.14
1928—1929	324	270 83.33	54 16.65	203 62.65	179 66.29	24 44.44
1929—1930	423	386 91.25	37 8.74	230 54.37	204 52.85	$\frac{26}{70.27}$
1930—1931	505	448 88.71	57 11.29	231 45.74	$\frac{208}{46.42}$	23 40.35
1931—1932	730	613 83.97	117 16.03	362 <b>49.59</b>	316 51.55	46 39.32
1932—1933	1115	751 67.35	364 . 32.65	485 43.41	357 47.40	$\frac{128}{35.16}$
1933—1934	1703	1198 70.35	505 29.65	640 37.58	468 39.07	172 34.06
1934—1935	858	545 63.52	313 36.48	+ 282 32.86	178 32.66	104 33.23
1935—1936	454	454 100.00	0	114 25.11	114 25.11	0
總計	6565	5016 76.41	1549 23.59	2869 43.70	2293 45.71	576 37. <b>1</b> 9

母蟲の外國から報告せられたのは前に述べた樣に何れも大・猫・虎の如き肉食獣の胃壁に 腫瘍を形成するのであるが、本邦では未だイタチ以外に寄生してゐる母蟲例の報告を見ない 様である。然るに1935年斧原と富羽とは他の研究用として猫を撲殺してゐる內,偶然本母蟲の寄生例2を得た。其第1例は同年4月30日,猫の噴門に近い胃の1部に小腫瘍を發見し此處に5個の本蟲を得た。第2例は同年5月10日,猫の胃と食道との移行部に於て小指頭大の腫瘍を見,ここに2個の本蟲を得た。是恐らく本邦に於ける猫有棘顎口蟲發見の嚆矢であらう。この機會に虎や猫の胃壁に見らるるものとイタチの食道壁に見らるるものとを比較しその異同を述べて見よう。

從來本蟲母蟲につき諸學者の報告したのは何れも記載觀察が不十分不完全で,或は之を異つた屬に入れて報告してゐる者も少くない事は吉田が曾てその報文中に述べた通りであるが、り就中最も詳細を極めたものは1920年にBAYLIS と LANE とによつて公表されたものであらう。それで外國產本蟲の



第 1 圖 猫の胃壁内面,右側黑圓形窪みは 蟲體の挿入せし所





第 2 圖 猫より得たる有棘顎口蟲

記載は主としてこの兩氏の説に從つて比較する事にする。 此兩氏の記載した材料は MITTER が印度で豹から得たもの で、BAYLIS に送つて來たときは アルコール 漬標本であつ たが初め用ひた保存液が何であつたか知らぬと同氏は言つ てゐる。

外國產本蟲の形態を見るに雌蟲の長さは9乃至31mm,雄

蟲は約10万至25mm,幅は概して雌蟲の方が雄蟲より大であるが0.6mmから2.5mmの間を往來してゐる。其他頭球部の大さ,頭球部及び體表にある鉤棘列の數,或は鉤•棘の形狀等に就ては唯Baylis及びLane兩氏の外之を記載してゐる人が殆どない。是等兩氏の記載は之を後表に示し詳說する事を略する。

富羽・斧原が猫から得た標本は、採集後直ちにアルコールに漬け保存したので、 著しく 收縮して居る様

<sup>1)</sup> 例へば此蟲の命名者である Owen の記載ですら今日から考へると 2,3 誤られた點がある位である.

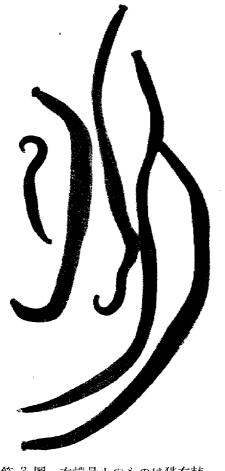
に思はれる。 從つて其全長も8乃至11mmで, 雌雄略同樣で大同小異である。

吉田がイタチがら得たのは新鮮な蟲體を1つ1つ10%フォルマリンに浸し努めて收縮を防 いで保存したので體長は雌蟲 28 乃至 36mm, 雄蟲 20 乃至 26mm で, 概して外國產又は日 本産猫有棘顎口蟲に比し長大であるが、之は恐らく主として保存操作による相違であらう。 其外多少老若の相違も關係してゐるかも知れぬ。今この3者の形態的記載を表記すると次の 通りである。

		第	2 表	(單位 mm)			
報告者	Baylis & Lane		吉田・斧原・富羽		吉 田		
宿主	豹		3尚		1 3	7 <del>-</del>	
性	8	우	8	4	\$	9	
體長	16.40—16.75	18.00—18.30	8-9	9.5-11.0	20 - 26	28 - 36	
體 幅(最大)	1.9	1.2	1-1.4	1.2—1.3	0.6-1.2	1-1.5	
頭 球 幅	0.55	0.5250.60	0.720.80	0.75—0.80	0.67—0.76	0.65-0.80	
頭 球 高	0	.23	0.30	0.40	0.31	0.31	
口唇幅	0.19-0.25	0.20	0.19-	0.20	0.20-	-0.23	
頸 相		•	0.64-0.70		0.60-0.80		
頭端ヨリ食道末端迄	3.15-3.50	3.404.00			3.42	4.05	
頭端ヨリ頸囊末端迄	1.8	1.9-2.0			0.99—1.26	0.99—1.35	
頭球鉤列距離	0.023				0.03-0.036		
頭球鉤列數	8-	-11	8—10		8		
頭 球 鉤 長	9.0	<b>)2</b> 5	0.025-	-0.029	0.025 - 0.028	0.0250.030	
頭球鉤幅	0.0	0.010		0.012		0.013-0.018	
體棘列鉤蘭	0.0	117			0.030	0.036	
體棘ノアル部位	體前方%		體前方%		體前方 <sup>3</sup> /5一%		
體棘ノ突起數(最多)	. 4	4		4		5	
卵	$0.060\times0.035$		長 0.063—0.075× p 0.034—0.042		長 0.0720.075× 市 0.0410.043		

本表によると3者の最も著しく相違してゐる點は體長である。即ち日本產猫有棘顎口蟲が 最小で外國產之に次ぎ、イタチのものが最も大きいのであるが、之は前にも一寸述べた樣に 恐らく保存上の操作の結果であらうと思はれる。 其1つの理由として、體棘列間の距離を見 るに、日本産猫のは此表に表してないが極めて近接して居るので測定が困難な位である。外 國産のとイタチのと比較すると,後者は前者の殆ど2倍になつてゐる。實際標本を見ても外 國産のは標本を見るに由ないが日本產猫のは體棘が體壁内に深く埋れてゐる樣に 見えるに拘 らず、イタチのは體壁からゾクゾクと突出してゐる狀態が明かに鏡下に見られる。之に從つ ても此3者の體長の相違は蟲體の收縮度に基因するものと思はれる。一方外國產のものでも

## 本邦に於ける猫の有棘顎口蟲 〔附〕其發育に就て



第 3 圖 左端最小のものは猫有棘 顎口蟲,中2條はイタチの有 棘顎口蟲3,右2條は同♀

LEIDY の報告したのを見ると雌蟲 31mm, 雄蟲 25mm とあるので日本産イタチの本蟲が別種であるとは思はれぬ。

頭球部の鉤列が外國產 8—11個 日本産猫のが 8—10個, イタチのが 8個とあるが之も絕對的の相違ではない。體棘の歯狀突起の最多數が猫のは 4個。イタチのは 5個となつてゐるが之も必然的のものではない。蟲卵はその長徑短徑共3者に於て多少の相違はあるが,蟲體の最も小さく現はれてゐる日本産猫のとイタチのとが略同長である事は,蟲體は保存液により著しく收縮するが卵殼を被つた卵子が試藥の為に收縮せぬので原形を保つてゐるからであらう。

之を要するに、此る者の異同に就ては之を區別するに足る程の特徴を見ぬ。ただ前述した蟲體の大さにつき疑問を持てば持てるのである。即ち外國産のものにも Leidy の報告したのは他に比し長大であると言つたが、この Leidy の標本も米國産イタチ類 Mustela vison の胃壁から得たもので、著者は當時之を Cheimeanthus socialis Leidy としたのを後人が有棘顎口蟲と同定したのである。寄生する部位こそ異なれ近似したイタチ類で、米國産のものと日本産のものから同樣な蟲體の得られた事は面白いと思ふ。然し日本のイタチに就ては第1表に掲げた樣に、吉田が十數年來數千匹の解體に際し其半數のイタチに食道腫瘍を見るに拘らず、1つの胃壁腫瘍を發見し得ないのは奇しき事だと思ってゐる。

本邦イタチには吉田の調査によると殆ど共過半數が本蟲に侵されてゐるに拘らず、外國でも本邦でも猫や犬や虎などに何故に本蟲を見る事が少いかと云ふ疑問が當然起るのであるが、之は恐らくイタチでは食道に異常の腫瘍を形成しても絕對に飲食物の通過を防止し、宿主を仆すと云ふ程の危害を與へぬので、本蟲が寄生しても尙ほよく生存してゐるので吾人の目に觸れる機會が多いのであらう。之に反し猫・犬等では胃壁に腫瘍を形成し多くは胃壁を穿孔するので宿主は之が爲めに斃死するから、吾人の眼に觸れぬ内に本蟲を宿す猫・犬が死亡する爲ではあるまいか。然し今後一層注意して猫・犬を調査したり其死體解剖などにより研究したならば、今日より高き寄生率を見る樣になると思はれる。現に印度か暹羅ではこの寄生蟲に注目する人が出來てから、舊來より一層多くの寄生例が發見されてゐる。この意味に於て今囘富羽・斧原が猫に本蟲を始めて發見した事は、今後本蟲猫寄生の發見先達として有意義だと思ふ。

更に本蟲の寄生率がイタチに高く大・猫等に少いと云ふ問題を解決するには、本蟲の發育 感染徑路を探究する事が最も重要である。吉田は多年之が研究に沒頭し其一部の成績は時々 斷片的に報告したのであるが、本研究は本邦の如き冬期寒冷甚しく蟲卵の發育し得ざる地方 に於ては誠に困難なるものがあるので失敗又失敗で、其成績が遅々として擧がらぬのは誠に 残念である。今月迄に得た結果を略述すると次の樣である。

吉田が本蟲卵の發育實驗を始めたのは1924年であるが、本蟲卵は冬期は室溫で發育しないので冬期は攝氏 27° 乃至 34°、普通 30° 內外の孵卵器中にて發育せしめた。 其材料は母蟲の子宮より採集した卵子である。この子宮卵子は卵殼內に未分割卵細胞を含藏してゐるが、之を 1 週間乃至10日間孵卵器中に入れて置くと、卵殼內に仔蟲を育成し間もなく卵殼を破つて孵化するのである。此事實を發見した吉田は曾て。Baylis 及び Lane の論文中にある、本蟲卵は子宮内にて既に仔蟲を育成すると云ひ圖迄掲げてゐるのに疑を起し、Baylis 氏に書信を以て此疑問を糺し且つ氏の檢査した蟲體の保存液は何であるかを尋ねてやつた處、1925 年 6 月5 日附の書信で、始め保存した液は何か分らぬが氏が受取つたときはアルコール 漬であつたと云ひ、更に附記して「貴下の標本は雌蟲未熟なるべし、本屬の屬する Spiruroidea 上科のものは多く仔蟲を藏するを例とす、尚ほ確證を要す」と言つて來た。

吉田の標本は Baxlis が推量した様な未熟雌蟲でなく同氏の調べたものより却つて大きいのみならず、その子宮卵を人工的に培養し仔蟲を育成せしめた事により、同氏の推定が間違ってゐる事が知られる。又當時支那の北京協和醫學院に在職してゐた Faust 教授も支那で往往大の糞便中に仔蟲を包藏しない本蟲卵を見たと語つてゐた。斯樣にして吉田の實驗により、本蟲の子宮卵はまだ分割を始めてゐないが人工的に 27°—84°C、又は夏期は室溫にて1週間乃至10日間に卵殼內に仔蟲を成育し、之が間もなく孵化脫殼する事を1925年初に發見した。

其後この事實が確である處を知るのみならず最も條件の好い場合には4日乃至5日で仔蟲を育成する事が分つた。而して孵化脫殼前の卵殼內仔蟲は第1回脫皮の準備をしてゐるので、 孵化したてのものは舊皮を以て鞘狀に被はれてゐる。

斯様にして吉田は本蟲の胚發育を實驗し得たので、次に胚後の發育即ち本仔蟲が宿主に侵入感染する經路を探究する為、1925年4月28日 孵化仔蟲を2頭の白鼠に試食せしめ直達感染の有無を檢せんと試みたが失敗した。 弦に於て中間宿主を必要とするものならんとの考により之が研究を志し一方イタチの食物を調査し、 魚類・蛙・昆蟲・甲殼類なる事を認めたので、1926年人工的に孵化せしめた仔蟲を金魚と同一器中に入れ感染の有無を檢したが、 冬期室温にて人工孵化仔蟲を生存せしむる事が困難であると共に、 金魚を孵卵器中に入る 」事も困難な為か、試驗は結果を見ずして終つた。 又蛙を用ひて同様の試驗を行つたが同じく結果がなかつた。 斯様にして中間宿主の探索に力を盡したが、本邦の如く冬期に自然孵化の出來ない卵を冬期人工的に育成し胚後發育の研究を行ふ事は甚だ困難である。 その為め冬期に採集した蟲卵を冷藏し 4,5 月に至り試驗するので色々の故障が起る故、久しく結果を見る事なした經過した。

1932年夏以來中間宿主を淡水の浮游生物の間に見出さん事を企て就中小形甲殼類を用ひて實驗した結果 Cyclops が最も長く人工的に飼はるる事も認め、之を用ひて孵化仔蟲の感染を試み同年10月に至り之が成功を見、爾來幾多の實驗により之を確證し、兹に始めて本蟲の中間宿主が Cyclops なる事を認めたので、此後の發育は極めて容易に進行すべしと思推し感染 Cyclops を以て猫に試食せしめたが中々思ふ樣に感染せぬ。

茲に於て吉田は本蟲の胚後發育につき1個の中間宿主を要するか或は2個の中間宿主を必要するかにつき之を決定せん事を企てた。即ち第1段として1個の中間宿主を必要とするものなれば感染 Chelops を最終宿主たるべき猫に試食せしむれば母蟲を得るであらうと云ふ考の下に實驗しようとし、第2段は2つの中間宿主を要するものなれば第1中間宿主は Cyclopsとし第2が何であるかを探索する實驗を行はねばならぬ事になつた。

第1の實驗として吉田は1988年春以來本仔蟲を含む Cyclops を猫に試食せしめた,即ち6月19日,24日及び7月3日の3回に亘り Cyclops を猫に與へた。然しこの試驗動物は吉田が 旅行中斃死したので直ちに檢査する事を得なかつたが、保存標本につき調査の結果は感染陰性であつた。共後數回の猫試驗に何れも感染を見なかつた。

第2段の實驗即ち第2中間宿主檢索として魚類・蛙・蛇の如きイタチの食物となるものに見當をつけ、先づ第1に1938年夏金魚と感染した Cyclops とを同一器中に入れ感染試驗を行ったが、材料少く實驗例乏しき為め確實な結果を得なかつた。1935年夏感染した Cyclops を蛙に試食せしめた實驗に於て、その腸外側附近に本蟲の幼蟲を認めた。然し之も實驗例少き為め確かとは言へぬが其蟲體の不完全な寫真ではあるが之を撮影し後日の確證を俟つ事にした。處が1936年春以來金魚を以て實驗中であるが、色々の故障の爲め思ふ樣に行かぬ。然した。處が1936年春以來金魚を以て實驗中であるが、色々の故障の爲め思ふ樣に行かぬ。然し、幸に少數の例に於て金魚に感染する本蟲を發見した。目下その實驗を繼續中で、本夏中には待望の結果を得たいと思つてゐる。

以上は吉田が本蟲發育に關する研究の道筋で、其詳細は一部は既に發表し一部は近き將來に於て發表したいと思つてゐる。

因に記す。吉田が1982年に Cyclops が本蟲の中間宿主である事を發見し、翌1988年4月の日本寄生蟲學會に報告し、日本病理學會に發表したのであるが、成可く早く之を歐文報告としたいと思ひ外國雜誌に交渉した處、早くとも1年半はかよると云はれたので、故五島先生に御相談して學術研究會の日本動物學輯報に掲載して戴く事になつた。それで比較的早く歐文の報告を得たが、それでも相當時日が經過する間に Bankok の Chalen Prommas<sup>2)</sup> 外 1 名の名で本蟲の中間宿主が Cyclops である事を報告した。 斯樣の關係があり、吉田の論文報告につき故五島先生の御好意を得た事が甚だ多いので、 故に本蟲發育の大要を掲げて五島先生に深甚の謝意を表したいと思ふ。

<sup>2)</sup> 文獻記載は吉田の前著に譲る